

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和3年度学校評価 結果・学校関係者評価

達成度(評価)	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

1 前年度 評価結果の概要	・特別支援教育や教育相談を充実させ、「見守りたい子」について組織的に対応する体制を整えてきたことにより一定の成果は見られたが、全体指標である「自分にはよいところがあると思う」は74.7%、「先生はあなたのよいところをほめてくれる」は78.5%と目標には達しなかった。また、感情をコントロールできず、落ち着かない児童が多いこと、学力面では上位と下位の差が大きく、基本的な知識・理解の定着や思考力、判断力には個人差があることが課題である。児童の「自己有用感」を高めるために、一人一人が安心して生活できる集団づくり、豊かな心を育む教育、生徒指導の三機能を生かした授業づくりを推進していくことが必要である。
------------------	---

2 学校教育目標	自らを友達を大切に思い、未来に向けて花開こうとする桜つ子の育成 — 日々の積み重ねを大切に作る学校づくり —
----------	---

3 本年度の重点目標	<p>「ひとつ・ひとつずつ」を合い言葉に、一人一人の教職員が、学校教育目標の実現に向けての意識を高く持ち、子供の「自己有用感」を高める取組を推進する。</p> <p>◆全体指標「自分には、よいところがあると思う」…80%以上、先生はあなたのよいところをほめてくれる…85%以上)</p> <p>① 教職員の協働意識・体制の向上……○学校目標と一貫性のある学年目標の設定 ○学年の協働・連動性、校内の報告・連絡・相談 ○学習規律の徹底 ○ICTを活用した授業実践の蓄積</p> <p>② 自己実現を図るための生徒指導の三機能を意識した実践……○決めさせ、考えさせ、認め合う授業の実践 ○「出番」「役割」があり、「承認」される授業・活動の創造</p> <p>③ 子どもの困り感に寄り添う支援、やさしい子を育む指導の充実……○特別支援教育に関する職員の知識の向上 ○教育相談体制の構築 ○人権・同和教育、いのちの学習等心育てる教育の充実 ○地域人材の活用</p>
------------	--

4 重点取組内容・成果指標 中間評価 5 最終評価

(1)共通評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価	主な担当者	
重点取組			中間評価		最終評価					
評価項目	取組内容	成果指標(数値目標)	進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価			意見や提言
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイプランの成果指標を達成した教師80%以上 →学校評価職員アンケート	○学期毎に学力向上対策評価シートに自己評価と改善策の記入をすることにより、授業力向上のためのPDCAサイクルの構築を図る。 ・学び合い活動を日常的に実践する。	B	・8月下旬の全国学力調査の結果公表を受けて、分析・研修を行い、学力向上対策評価シートの記入と実践見直しを行う。 ・コロナ禍ではあるものの適切な距離を保ちながらペア学習やグループ学習などを積極的に取り入れられている学級もあり取り組みを継続する。	A	・学力向上対策評価シートの自己目標の達成に向けて、個々の教師がこまめな自己評価と自己研鑽を行い、授業改善に努めてきた。アンケートの結果、目標達成度が、個人では86%、全校では97%と成果指標を大きく上回ることができた。 ・コロナ禍ではあるものの適切な距離を保ちながらペア学習やグループ学習などを積極的に取り入れてきた。	A	・コロナ禍でもマイプランを工夫しながら達成できた職員が多い。目標達成度97%はすばらしい。 ・先生方の努力が学力向上に結びつかないのが残念だ。 ・文章問題の苦手、自分の意思を伝えることの苦手は全教科に通じることなので、家庭での対応も大切だと思う。	※かしこい子プロジェクト ・学力向上コーディネーター
	○校内研究を軸とした主体的・対話的で深い学びの展開	○「あなたは毎日の授業(学習)がよく分かる」と回答した児童80%以上 →校内研究授業アンケート 学校評価児童アンケート	○全ての授業で、「やってみよう」「かんがえよう」「たかめあおう」の合い言葉にした「桜岡スタイル」を整理し、構築する。 ○1人1台パソコンをどの段階でどのように活用するか、アイデアを出し合い、ICT活用シートに蓄積する。	B	・7月に実施したアンケートで、「あなたは毎日の授業(学習)がよく分かる」と肯定的に回答した児童は88%だった。ただ、学年ごとに見てみると、一年生が78.6%で80%に達していない。一学期に学習スタイル(桜岡スタイル)の見直しをし、1人1台パソコンの活用の研修をしたので、二学期以降はそれを活かした授業を行っていききたい。	A	・12月に実施したアンケートで、「あなたは毎日の授業(学習)がよく分かる」と肯定的に回答した児童は94%だった。学年ごとに見ても、全学年80%以上の達成ができた。二学期は一人一台端末を用いて、各学年で模索しながら授業をしていた。ICT活用シートも全職員に作成していただいた。これをもとにさらに来年度の研究へつなげていきたい。	A	・子どもの授業理解度は高い。一人一台端末の活用ができていく。 ・家庭学習を充実させることを促すような工夫があるとよい。 ・パソコンが主流となる時代になったが、表現力を身に付けさせるために、やはり「書く」指導は必要なのではないか。 ・学校での対話活動も役立つと思う。	※かしこい子プロジェクト ・研究主任
	○児童の基本的な学習習慣の育成	○「背・目・手」と「か・つ・お」を共に守れた」と回答した児童80%以上 →学校評価児童アンケート	○生徒指導の三機能を生かした授業作りを進めるとともに授業にUDの視点を取り入れる。 ○学習規律定着のために「背・目・手」「か・つ・お」を合言葉に学習の構えを作る。学習の終わりには、学んだことを自分の言葉でふり返り、表現できる児童の育成を目指す。	B	・引き続き全職員で、生徒指導の三機能やUDの視点を取り入れた授業づくりについて共有していく。 ・7月に実施したアンケート調査で、「背・目・手」「か・つ・お」ができてると回答した児童は89.6%だった。学習のふり返りを明確にし、各学年での取組については、学んだことを自分の言葉でふり返り、職員で共通理解を図りながら全学年で取組を進めていく。	A	・学校評価児童アンケートの結果、「背・目・手」や「か・つ・お」ができていく児童は全体の89.2%と、数値目標を達成できた。学習の終わりに学んだことをふり返ることができた児童は全体の80%だった。ふり返りの視点を職員で共通理解を図り、掲示物を準備して児童に示したことで、少しずつ定着させることができた。 ・生徒指導の三機能を生かした授業作りや、UDの視点を取り入れた環境整備は、9割の職員が意識的に行うことができた。	A	・読解力は読書で培われるように思うが、なかなか身に付かないのが現状である。 ・授業がよくわからない子どもへの対応はうまくいっているのか。	※かしこい子プロジェクト
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○「自分にはよいところがある」と答えることのできる児童80%以上。	○「心を考える日」に人権教室を3回、人権集会1回を実施し、職員や子どもたちの共通理解を図る。 ○絵本の読み聞かせを通して、いのちについて考えさせることで、自他の生命を尊重する心を育てる。	B	・第1回の人権教室(「人権と特別支援学級への理解」といのちの学習を学年ごとに実施し、職員や子どもたちの共通理解を図った。 ・平和集会(8月6日)オンライン形式で実施し、平和の尊さと命の尊厳を考慮する機会とした。 ・児童の感想を掲示し、全校の学びを共有したり振り返りたりできる環境づくりに努めた。 ・「自分にはよいところがある」と答えた児童は75.6%であった。今後もいのちの学習の取組を進めていく。	B	・年3回の人権教室と年2回のいのちの学習、人権週間に合わせた、講師招聘による人権集会や全校人権標語等を年間計画に沿って取り組むことができた。「自分にはよいところがある」と答えた児童は、目標の80%には至らなかったが78%と昨年より増加の傾向が見られた。 ・今年も学年に応じた絵本の読みかせや人権学習を通じて、いのちや人権について考える機会を設定し、自己肯定感の向上に努めていきたい。	B	・学校からのお知らせで活動の様子がよくわかる。 ・「梧竹に学ぶ」は、素晴らしい取組みだと思う。 ・命の大切さを十分に伝えることができていく。子どもの自己肯定感がもう少し高まること、よい。 ・自分のよいところがあると思わない子どもが少しでもいるのはどうか。	※やさしい子プロジェクト ・人権・同和教育担当 ・教育相談担当 ・道徳教育
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ防止等(いじめの定義、いじめの防止等のための取組、事案対応等)について組織的対応ができていくと回答した教員90%以上	○いじめの認知・認知の組織的対応マニュアルの共通理解を図る。 ○いじめの対応についての研修・会議を年間に4回以上行う。	B	・いじめについて組織的対応が「できている」「おおむねできている」と回答した職員は100%、いじめに関する研修を2回実施できたため、あと2回分の実施時期、内容等を検討し、職員全体の研鑽につなげる。	B	・いじめについて組織的対応が「できている」「おおむねできている」と回答した職員は100%であったが、いじめに関する研修の計画が不十分で、3学期に2回実施することになった。来年度は、早い段階で実施できるような計画が必要。	B	・いじめ認知がよくできており、組織的に対応できている。いじめが減ってきていることは嬉しい。 ・いじめの因果関係は分からないが、低学年児童の不登校は心が痛む。	※たくましい子プロジェクト ・生活指導担当
	◎自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動	○「あなたは、今がんばっていること(目標)や将来の夢がありますか」について肯定的な回答をした児童(小学校5・6年生)80%以上	○学校行事や体験活動において、目標と振り返りを運動させた活動を充実させる。 ○学級活動等の時間の中で、「出番」「役割」があり、「承認」される授業・活動を創造し、実践を積み重ねる。 ○様々な活動に対する目標や振り返りをキャリアサポートを活用して行う。	B	・7月に実施したアンケート調査で肯定的に回答した児童が94.3%だった。 ・縦割り活動(6年)や自然教室(5年)の前にはあてを考えた。児童に自分達の役割や目標を持たせて取り組ませた。活動後にふり返りを行い、よくできたところを互いに認め合い達成感を味わわせたり、次の活動への意欲につなげさせたりした。 ・引き続き、全学年で学級内や学級外で出番・役割・承認を意識した声かけや指導を行う。	B	・12月に実施したアンケート結果で肯定的に回答した児童が82.4%だった。日頃から縦割り活動や卒業プロジェクト(6年)などで活動の前に自分達の役割や目標を持たせることができたことや、活動後の振り返りを活動の前につなげることができたことがよかったと考えられる。 ・桜・つばきがらみで週間は各クラスで目標を立て、それぞれに出番・役割を持たせるような行事を取り入れた。全クラス目標達成とはいかなかったが、今後も学年や学級で出番・役割・承認を意識した取り組みを積み重ねていきたい。	B	・いろいろな職業の人の話を聞かせてもらうような授業も、子どもの夢につながるのではないかな。	※かしこい子プロジェクト ・児童会活動担当 ・委員会活動担当
●健康・体づくり	●運動習慣の改善や定着化	●授業以外で運動やスポーツを行う時間が1週間420分以上の児童生徒70%以上	○わくわくタイムでの共遊(異学年交流)を計画的に実施し、外で遊ぶ楽しさを実感させる。 ○自力登下校や休み時間に遊ぶことを促すような声をかけ、体を動かす習慣化を意識させる。	B	・7月実施の生活アンケート結果や保護者との個人懇談を通して、児童の実態を把握することができた。 ・アンケート結果をもとに、児童や保護者への運動啓発や運動週間の設定、運動時間調査を行い、運動意欲の向上に努める。	B	・運動時間が1週間で420分以上の児童は54.1%と低かった。運動に意欲的な児童もおり、そうでない児童との差が大きい。全体として引き上げる必要がある。歩く、ストレッチをするなど軽い運動でも構わないことを伝え運動啓発に努める必要性を感じた。	B	・ゲーム性のあるレクリエーションを増やすと、子どもの運動への興味がわくのではないかな。 ・コロナ感染症の影響もあり、1日60分の運動はできなかった。運動量が減ってきているのは心配。	※たくましい子プロジェクト ・体育主任 ※やさしい子プロジェクト ・異学年交流
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。(1か月45時間、1年間360時間を超えないようにする。)	○校内安全衛生委員会が業務改善の視点から具体的な改善策を検討し、実践につなげる。 ○長時間労働の解消のため、学校行事、会議、研修の精選及び実施方法の工夫を進める。	B	・4～7月の時間外在校等時間の平均が45時間を超えた職員は全体の45%であった。学年団の協働、夏季休業中の職員研修の精選などにより、昨年度の同時期と比較すると、6、7月は改善している。しかしながら、さらなる改善が急務である。8月の校内安全衛生委員会にて具体策を検討する。	B	・校内安全衛生委員会を2回実施し、ストレスチェックの分析や業務の実態把握、改善のための具体的取組について、職員間で共有し、できるところから取組を進めた。 ・4～1月までの時間外在校等時間の平均が45時間を超えた職員は全体の30%であり、目標は達成できていない。感染症対策、生徒指導等の突発的な事案への対応が継続した課題である。	B	・コロナ禍で突発できない事案もある中、時間外在校時間が月平均45時間を超える職員数の減少に努めることができていく。 ・仕事量は負担大であるが、職員間のサポートができていく。 ・仕事量の多さに加えてコロナ対応と大変な時なので、体へ気をつけてほしい。	・教頭 ※校内労働安全衛生委員会(多忙化対策委員会)

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価	主な担当者	
重点取組			中間評価		最終評価					
評価項目	重点取組内容	成果指標(数値目標)	進捗度(評価)	進捗状況と見通し	達成度(評価)	実施結果	評価			意見や提言
○特別支援教育の充実	○特別支援教育に対する教職員の知識・理解の更新、向上	○見守りたい子の情報共有を行事に生かすと回答した教員が90%以上	○「配慮を要する児童への接し方や支援の方法」についての職員研修を、講師を招聘して行い、教師の専門性を高める。 ○特別支援学級を学年グループに配置し、「見守りたい子」の情報共有を年4回行い、児童の指導を連携して行う。	B	・講師招聘の特別支援教育の校内研を夏季休業中に行い、支援の必要な児童が意欲的に学ぶための授業づくりについて学び、教師の専門性の向上に努める。 ・「見守りたい子」の情報共有を4月に1回行い、新学年での担任の児童理解につなげた。今回は、運動会前の9月に情報共有し、児童が安心して運動会に臨めるようにする。 ・各学年に帰属する支援学級の担任が人権教室を行ったり行事や学習について配慮点を提案したりすることで、各教師の意識づけを図っている。	A	・講師招聘による研修では、一人一台端末などのICT活用について学んだ。支援学級担任が授業にICTを取り入れるための知識・技能を身に付けることにつながり、児童の授業への興味・関心を高めることにつながった。 ・「見守りたい子」については、特別支援部として年3回、生活指導・教育相談会として毎月、全職員が見守るべき子の情報共有をし、配慮事項を日々の指導や行事に生かすことができた。「見守りたい子」の情報共有を行事に生かすと回答した教員が90%以上だった。	A	・研修を十分に行い、組織的に情報共有もできている。 ・桜岡小の特別支援教育はとても充実している。支援を受ける子どもが増えているので、どのように支援をしていくかが引き続きの課題である。 ・外部の先生と学校内の先生との情報共有がされており、良い方向に向かっている。	※やさしい子プロジェクト ・特別支援教育コーディネーター
○教育相談体制の構築	○悩みを抱える児童の困り感を共有し、対応できる体制の構築	○「心配なことや困っていることがあ」と回答した児童が20%以下	○認知した児童の状況について管理職や教育相談担当、担任等と情報共有を行う体制を整備し、構築する。 ・すつきりにこにこアンケートの実施 ・「見守りたい子」の共有 ・SC、SSW、SSP、支援センター等との連携	B	・生活指導会で「見守りたい子」を共有し、全職員で対応方法を共有することができた。 ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、支援センターなどの外部機関と密に連携を行い、多方面から介入を行い、個に応じた相談体制作りや介入を行うことができたため、2学期以降も引き続き、学校組織として取り組んでいく。	B	・「すつきりにこにこ」アンケートを実施し、気になる児童には聞き取りをしながら一人一人の心配事や困っていることに対応した。しかし、「心配なことや困っていることがあ」と答えた児童が20%を上回る学年もあり、十分に達成したとは言えない。 ・「見守りたい子」の情報共有を図った結果、学校組織として外部機関との連携をとりながら迅速に対応することができた。	B	・専門家、地域と共に密に連携ができていく。保健室などの子どもの心の拠り所を用いて、不登校から復帰できた子もいる。	※やさしい子プロジェクト ・教育相談担当

5 総合評価・次年度への展望	<p>◆◆◆果共通 ○◆◆学校独自 ○◆◆志を高める教育</p> <p>・今年度の新たな取組である「いのちの授業」の実践をはじめ、人権教育、特別支援教育、教育相談など、豊かな心を育む取組や一人ひとりの困り感に寄り添う支援を強化・充実させたことにより児童の自己有用感等は徐々に高まりつつある。また、1人1台端末を活用した授業づくりや生徒指導面の課題についても学年団で情報共有し、チーム対応、共通実践が進み、成果が見られた。全体指標の項目1「自分には、よいところがあると思う」は78.0%、項目2「先生はあなたのよいところをほめてくれる」は80.4%であった。昨年度に比べ向上しているが、項目1は到達目標80%に届かなかったため、引き続き実践を積み重ねていく。</p>
----------------	--